

実践講座「労働運動の歴史に学ぶ」 木下武男

後期水曜日 18:30-20:00 不定期 10回

講義の主旨

本講義の目的は、労働運動の歴史のなかから労働組合の理論を学び、その理論にもとづいて、この日本で、新しい「本当の労働組合」を創造するための手立てをつかみ取ることにあ

る。
労働組合は資本主義のもとで貧しい虐げられた者たちが身を守り、生きるために闘う武器としてつくられた。しかし日本の労働組合は「本当の労働組合」(ユニオニズム)ではなく、世界で見ることのない土着の花・「企業別労働組合」なのである。戦後労働運動の衰退を繰り返すためにも、貧困と過酷な労働、雇用不安が支配する労働者の状態を克服するためにも、「本当の労働組合」を日本で創造することが急がれている。講義は、「労働組合の歴史と理論」と「戦後労働運動の『敗北』」、「労働組合の未来」、この三つを柱にしておこなう。労働組合論は理屈として学ぶべきものではなく、闘う武器を身につけるためである。

毎回の講義テーマ

第1回(10月4日):労働組合の遠祖・ギルド。労働組合の根源的機能は労働者間競争の規制だが、その競争規制の原理は、階級は異なるがギルドに源流を見いだすことができる。

日本におけるギルドの不在は、今日のユニオニズム創造の上で負の伝統となっている。

第2回(10月25日):初期労働組合。労働者の相互扶助組織・友愛協会を土台にして労働組合は誕生する。同時に産業革命期、労働者は暴動や機械打ち壊しの運動を進めた。労働者の反抗と労働組合への結集をつうじて労働者の階級形成がなされる。

第3回(11月8日):職業別労働組合。資本主義のもとで労働組合を不動のものにしたのが職業別組合である。担い手は徒弟制のもとで熟練労働者だった。狭い労働市場のなかで労働者同士の競争を規制しやすかったから確立することができた。

第4回(11月22日):労働組合の組織形態の転換。高い熟練をもたない一般の労働者が、職業別組合の閉鎖性を克服し、一般労働組合(ジェネラル・ユニオン)をつくりあげた。それを推進したのは自覚ある個人の活動家集団だった。

第5回(11月29日):アメリカの産業別組合。職業別組合と産業別組合との二つの潮流の対抗があり、産業別労働組合主義者は不屈に闘った。経営者の企業内分断と職業別組合の保守性を乗り越えて産業別労働組合を確立する。

第6回(12月6日):「産業別組合の時代」における労働組合機能。今日の労働組合の組織と機能のあり方、競争規制の三つの方法、企業別組合との対比について明らかにする。

第7回(12月13日):戦後日本の労働運動の歴史(前半):ユニオニズムをついて創造できなかった歴史をふり返る。戦後直後、「本当の労働組合」を築くチャンスを逃した。その後、日本的労使関係の形成を背景にして民間大企業争議は敗北する。

第8回(1月10日):戦後労働運動の歴史(後半):労働者の企業主義的統合を基盤にして協調的労働組合が全国制覇をはたした。その要因を解明する。労働運動衰退の現地点を確認

しておくことが重要である。

第9回（1月24日）：日本的雇用慣行の終焉と新しい運動基盤。労働者の悲惨な状態はこれまでの慣行ではない新たな代替システムを求めている。そのシステムの構築者こそユニオニズムである。

第10回（1月31日）：業種別職種別ユニオンによる労働運動の再生。運動の基盤となる非年功型労働者が登場し、その未組織労働者を組織化していく外部構築論を明確にする。関西生コン支部の経験から学んだ業種別ユニオン運動は新しい地平を切り開きつつある。

【テキスト】

木下武男『労働組合の歴史と理論』（仮、近刊）岩波書店

【参考文献】

木下武男『日本人の賃金』1999年、平凡社新書

木下武男『格差社会にいどむユニオン』2007年、同時代社

木下武男『若者の逆襲—ワーキングプアからユニオンへ』2013年、旬報社